

読本『画本玉藻譚』生成考

——狐変妖婦説話との関わりを中心に——

馮 超 鴻

一、問題提起

近世の狐譚において、読本『画本玉藻譚』(岡田玉山著と題す^①)、五卷は看過できない一書である。文化二年(一八〇五)に上方で刊行された『画本玉藻譚』は、その二年前(一八〇三)に、江戸で上梓された読本『絵本三国妖婦伝』(高井蘭山著、十五卷)とともに、三国伝来の狐変妖婦譚を構成し、東西一対となる狐譚の集大成とも言える。

『画本玉藻譚』において、九尾の狐は、唐土では妲己の魂を吸い取り紂王を惑わし(妲己譚)、また天竺に渡り花陽夫人に変わって斑足王を魅惑し(花陽夫人譚)、さらに本朝に逃げ込み玉藻前と化して鳥羽院を蠱惑し(玉藻前譚)、最後に退治される。中世以来、狐は周幽王の愛妃である褒姒と強く結び付けて描かれていた。

『絵本三国妖婦伝』はこれを受け継ぎ、狐妖が本朝に渡る前に、周幽王を妖惑する褒姒の物語(褒姒譚)を加えて物語る。その意味では、『画本玉藻譚』が褒姒譚を全て切り捨てた事実、は画期的

な発想とも言え、これが『画本玉藻譚』の最も大きな特徴となる。

『画本玉藻譚』は『絵本三国妖婦伝』より二年遅れて印行されたが、玉山はその後語に、「寛政九年(一七九七)には既に成立していた事実を打ち明ける^②。これに対し、中村幸彦は、『絵本三国妖婦伝』の蘭山が『画本玉藻譚』の計画を察知し、先手を打って出版したと見なし、横山邦治は、『絵本三国妖婦伝』の挿絵が、「いかにも忽卒の間の仕事と見える」などとも指摘する^③。後述するが、『画本玉藻譚』の内容からは、従来の狐譚が利用されたことや、話にさまざまな潤色が施され、工夫が凝らされたことが窺える。『画本玉藻譚』の出来具合などから考えれば、『絵本三国妖婦伝』と『画本玉藻譚』の刊行経緯に関する両者の指摘は、首肯すべきであろう。

『画本玉藻譚』は出版後、広く狐譚に影響を及ぼしたと考えられる。例えば、『玉藻前竜宮物語』(文化五年・式亭三馬著)の序文に、「まづ手はじめに、たつのみやこへこ、ろざし、岡田玉山仕入のくもにうちのり」のように玉山の名が見え、同じ作者の『玉藻前

三国伝記（同六年）も全体的にはほぼそのまま『画本玉藻譚』を踏襲する。また、佐藤悟が指摘したように⁽⁴⁾、「糸車九尾狐」（同五年・山東京伝著）の挿絵も『画本玉藻譚』の影響を受けている。近世の狐変妖婦譚の系譜の上で、『画本玉藻譚』は重要な位置を占め、これに対して積極的に研究を行うことは、有意義かつ必要である。

しかしながら、『画本玉藻譚』に関する先行研究は多いとは言えない。『画本玉藻譚』の形成に関し、前掲の中村幸彦「読本展回史の一齣」に、「刊本『勸化白狐通』などによって、『絵（画）本玉藻譚』が著述されていた」と言及され、堀誠「『三国悪狐伝』と玉藻前説話の変容」に、『画本玉藻譚』の「姐己」に関する部分は全面的に『通俗武王軍談』に依拠していた⁽⁵⁾と指摘された。両論文は『画本玉藻譚』だけを対象とした論考ではなく、その方面に関する分析には及んでいない。本論文ではそこに残された課題を取り上げ、『画本玉藻譚』における『勸化白狐通』と『通俗武王軍談』の影響を積極的に考察したい。また、管見の限り、『画本玉藻譚』と室町時代物語「玉藻の草子」との相関関係を論述するものが見当たらず、特に実録的写本『三国悪狐伝』との関わりが必ずしも明らかでない。さらに、『画本玉藻譚』の著者が如何に従来の狐変妖婦説話を利用しつつ、作品に変化をもたらしたかに関する考察も必要である。

よって、これらの課題を解明すべく、まず、『画本玉藻譚』を「姐己譚」・「花陽夫人譚」・「玉藻前譚」に分け、それぞれ『通俗武王軍談』・「勸化白狐通」・「玉藻の草子」との関わりを考察すると同時に、『画本玉藻譚』の著者がこれらの先行作品に拠りながら、

如何に新しいイメージを創り出したかを明らかにする。最後に、『三国悪狐伝』の影響についても触れたい。

二、狐変妖婦説話の受容、および話中で施された変化

I 「姐己譚」の考察

『画本玉藻譚』巻一・二に当たる「姐己譚」は、九尾の狐が姐己の体を奪い、紂王に無道を勧め、終に太公望と武王に退治されるという内容を持つ。この「姐己譚」がほぼ逐語的に、『通俗武王軍談』の巻一（巻四に依拠して構成されることをまず指摘したい。『通俗武王軍談』（二十四巻）とは、「通俗」の二字が示すように、中国の講史小説を日本語に翻訳したもので、いわゆる「通俗物」の一種である。宝永二年（一七〇五）に、清地以立によって刊行された。

「姐己譚」が『通俗武王軍談』に基づくことを示す例として、以下の一節が好例である。姐己が都に赴く途中、恩州の駅館に宿り、妖魅の出没を聞いた父蘇護が、侍従に護衛を命じた巻一「蘇姐己駅堂被魅」の部分である。

姐己を中堂に臥しめ、数十人の侍女短剣を帶し床の前後を衛り、燈を点じ名香を焼き、よく戸を閉て固く封し、中堂の四方には守護の武士、兵器を帶しかわるべくに夜巡りす。

『通俗武王軍談』巻一「蘇姐己駅堂被魅」の当該部分は、姐己ヲ中堂ニ臥シメ、数十人ノ侍女各短剣ヲ持テ櫛ノ左右前後ヲ衛リ、燭ヲ燃シ香ヲ焚テ、ヨク其戸ヲ封ジ、中堂ノ外ニハ守護ノ武士皆兵器ヲ帶シテカハル（二巡ル）。

とあり、『画本玉藻譚』と『通俗武王軍談』の部分と比べると、『画本玉藻譚』は表現および字訓を含め、内容的に『通俗武王軍談』を襲用していることが分かる。このような箇所が、『画本玉藻譚』の「姐己譚」の全編に亘って多数存在しており、『通俗武王軍談』に大いに依拠する事実を端的に示している。

また、「姐己譚」の標題を考察すると、全十六条のうち十一条が『通俗武王軍談』の標題を直接引用、あるいは少し改編して用いている一方で、新しい標題を五条加えたことが分かる。この標題の構成から、『画本玉藻譚』の著者が『通俗武王軍談』に依拠しながらも、変化を加えた姿勢が垣間見える。近世において、『通俗武王軍談』の流通により、狐変姐己の話が広く認識されたと指摘されるが、『画本玉藻譚』の著者がかような既存の姐己の説話に依拠しつつも、話中に独自の工夫を施す点は注目に値するであろう。

このような加工は、登場人物の簡素化という点にも見られる。「姐己譚」において、著者が煩雑な人物関係を意図的に簡略化し、主役にスポットを当てて内容を集約させる傾向が窺える。例えば、姐己と並んで紂王の無道を助長する佞臣費仲の描写について見てみよう。『通俗武王軍談』の「子牙收服崇侯虎」では、紂王が姐己の勧めを聞き、胎児の性別を見ようとする所に、「紂王スナハチ費仲ヲシテ、城中ノ孕婦ヲ授シムルニ、費仲即時ニ数十ノ孕婦ヲ捉テ、楼下ニ至ル」とあるが、「姐己譚」(「武王起兵伐商辛」)では、単に「紂王又是然とし、城中の孕婦数十人を捕へて、楼下に至る」とし、費仲の名を挙げずストーリーを簡素化

している。

同様に、「姐己譚」のほかの費仲が重要な役割を演じる部分においても、その名が悉く省略される。それを端的に示すのは、西伯を西岐に帰さないことを勧める部分である。『通俗武王軍談』(「西伯陷囚羑里城」)では、

費仲又奏シテ曰、西伯ノ精靈ナルコト、終ニ大ナル患ヲナシ、大王殺シ玉ハズンバ、コレヲ囚置テ……

と、費仲より紂王に提言するが、「姐己譚」(「紂王囚西伯羑里城」)では、

時に姐己とめて曰く、西伯の精靈なる、終に天下の患ひをなさん。大王殺す事を痛み給は、囚へ置て、国に帰し給ふ事なかれ……

と、帰さないことを勧める人物をまるごと姐己に入れ替えた。これは、費仲の影を薄くすることを通じて、主人公姐己に脚光を浴びせ、紂王を淫逸無道の暴君ならしめた罪を姐己に集中させる意図を以て、『画本玉藻譚』の著者が改編したとも捉えられよう。

II 「花陽夫人譚」の考察

『画本玉藻譚』巻三の「花陽夫人譚」においては、唐土を去つた九尾の狐が天竺に逃げ込み、花陽夫人と化して斑足王を魅了し、最後に弥陀の三尊の仏光によって本性を現わす様が描かれる。この「花陽夫人譚」は主に「勸化白狐通」を利用してゐる。『勸化白狐通』(三卷)とは、いわゆる「長編仏教勸化物」の一篇であり、明和三年(一七六六)に刊行され、僧单潮海誉が記した

序文を持つ。その内容を概括すれば、三国伝来の狐変妖婦譚の唐土部分を持たないもの(単に妲己の名に言及するのみ)と考えてよい。

具体的に分析すると、『画本玉藻譚』の「花陽夫人譚」において、「獅子が天羅國の后を銜えて去り、一年後懐妊した后を乗せて戻ること」や、「斑足王が花陽山にて女子と出会い、宮中に連れ帰ること」、「花陽夫人が侍女を連れ、僧侶を破戒させること」、「愛妃である采姫が斑足王を諫めること」、および「花陽夫人が采姫を射殺すること」などが、『勸化白狐通』に拠る内容である。この『勸化白狐通』は、寛政三年(一七九一)に「勸化」の二字が改められ、『通俗白狐通』(四卷)の書名で再版された。序文、口絵などを除き、『通俗白狐通』と『勸化白狐通』とは内容が同一である。両書はともに『画本玉藻譚』に先行するので、『画本玉藻譚』が依拠したのは、必ずしも『勸化白狐通』ではなく、『画本玉藻譚』の出版年次により近い『通俗白狐通』である可能性が高いであろう。

『勸化白狐通』と『通俗白狐通』を比べると、「花陽夫人譚」には内容的に増加されたところが多く看取できる。例えば、九尾の狐が女の腹に入り、終に一人の女子が生まれる、という花陽夫人の誕生の経緯や、また、普明王が目より光を放ち、それに当たった花陽夫人が病気になることなどは、すべて『勸化白狐通』には見られない内容である。さらに、『画本玉藻譚』の著者が『勸化白狐通』に依拠しつつ、独自に改変を加えた部分も見られる。その際とられた筆法の一つは、『通俗武王軍談』に描かれた人物を借り、「花陽夫人譚」の別の人物に投影することである。

「花陽夫人譚」では、九尾の狐が変じた花陽夫人は斑足王にさまざまな無道を勧め、やがて王は残忍な暗君となる。花陽夫人はさらに、破戒した僧を獅子に食わすことを提言する(斑足王令驅獅子喰僧)。

斑足王大きに是を興有と欲ひ、先國に命じて千人の僧を狩とらせ、かたのごとく柵を結び、武士に命じて千人の僧を其中へ入れ(獅子に食べられる僧を)見る者、色を失ひける。斑足王と花陽夫人は、高樓に上り、是を見て手を拍て笑ひ楽む。

それを聞いた斑足王は「興有り」と感じ、またその残酷な場面を目撃しつつ、花陽夫人とともに「手を拍て」欣賞する場面が描写されている。ところが、『勸化白狐通』では傍線部に共通する行文がなく、単に、十年に一度国内で死刑囚を獅子に食わす習わしがあり、病氣となった花陽夫人はそれを見たいと斑足王に懇願する。花陽夫人はそれを見て回復し、斑足王は更なる罪人を獅子に食わす、といった内容にすぎない。

一方、『通俗武王軍談』では、妲己が紂王に種々の酷刑を勧めるが、その一つは「薑盆」(穴に毒虫を入れて人を穴に投げ込み、毒虫に食ひ殺させる刑罰)である。妲己が紂王に対し、姜皇后の侍女を「薑盆」に投げ込むようけしかけ、その無様な有様を見るや(紂王作酒池肉林)。

見ルニ氣毛消、聞ニ魂失ヌベシ。紂王ハ妲己トトモニ大ニ笑フテ曰、皇后ノ計ニアラズンバ、此叛妾等ヲ滅事能ハジ。と、「大いに笑ひて」興に入り、他人の苦痛を楽しむ残酷な紂王

として描き出されている。さらに、その続きの場面において、酒で造った池に溺れて苦しむ人びとを見た紂王は、

妲己トトモニ掌ヲ撫テ、大ニ笑テ曰、コノ樂ミ極テ吾ガ意ニ称リトテ……

と、妲己とともに「手をうちて笑ふ」。これらの内容はすべて「花陽夫人譚」の斑足王の像と重なっており、『画本玉藻譚』の著者が『通俗武王軍談』を利用し、紂王の像を斑足王に投射したと言えよう。また、『画本玉藻譚』の著者が紂王のみならず、その臣下である費仲を「是善」に投影させることも看取できる（斑足王 眞浄波羅国）。

斑足王、佞臣是善といへる者に計義し、国の政を議すると偽り、四方大小の属国、百余国に使を馳て、日を限て、其王を都に呼ぶ。

と、斑足王が是善の姦計を聞き入れ、四方の国王を都に呼ばんとする。無論、「勅化白狐通」では、是善については語られない。『通俗武王軍談』を考察すると、その類似する部分に（西伯侯ハ商得^レ雷震^一）

費仲ガ曰、臣ガ見ニヨラバ、国ノ大政アリト詐称シ、四方ノ侯伯ミナ朝ニ入テトモニ議シコトヲ詔シ玉ハハ、四方ノ侯伯ミナ朝ニ来ルベシ。

と、紂王に姦策を献ずる臣下費仲が物語られている。その悪巧みの「政を偽つて諸侯を都に集める」内容が、「花陽夫人譚」と共通している。

これらの部分は、『通俗武王軍談』を利用し、その人物像を「花

陽夫人譚」に投影した方法を明示する。『画本玉藻譚』の著者は、『勅化白狐通』を踏襲しつつも、話容に変化を施して新味を加える。また、この検討により、『通俗武王軍談』は単に「妲己譚」の原拠となるのみならず、「花陽夫人譚」にまでもその影響を及ぼすと説明できよう。

Ⅲ 「玉藻前譚」の考察

「玉藻前譚」は『画本玉藻譚』の巻四・五に当たる。近衛院が病を思い、陰陽師安倍康成が玉藻前の正体を見破り、それを除くことを奏聞したが、牢獄に入れられる。後に康成は救出され、祈りによつて玉藻前の正体を暴く。玉藻前は那須野に逃げ、三浦介と上総介によつて退治されるが、狐の執心はさらに殺生石となり、最後に玄翁が成仏させるといふ粗筋である。「玉藻前譚」が「花陽夫人譚」と同様に、『勅化白狐通』に依拠する内容を後に提示し、まず室町時代物語「玉藻の草子」との関係性を考察したい。

玉藻前説話は中世に形成されたと考えられるが、写本・絵巻・奈良絵本など多様な形態で今日にまで伝わる。一括して「玉藻の草子」または「玉藻前物語」と呼ばれる。現存する最も古い文献は、文明二年（一四七〇）の写本（赤木文庫旧蔵）まで遡るが、江戸に入り、また承応二年（一六五三）刊本、およびその後刷本と考えられる寛文年間（一六六一～七三）刊本のように、刊本の形で世に流布していた。『画本玉藻譚』の「玉藻前譚」においては、「玉藻の草子」を借用し、その影響を受けた箇所がいくつか存在する。

例えば、玉藻前を除くため、康成が奏聞する部分（玉藻前被^レ命

執幣」)では、

院の御悩のうらひは宮中妖気のいたす所、臣勅命を受けて、泰山府君を祭り、丹誠にひまことを凝こしなば、御悩のうらひすみやかに癒いさせ給たまはん事、更に疑うたがひ有あべからず。

と、康成が泰山府君の祭りに言及する。泰山府君とは、中国の泰山の神であり、人の生死を司ると信じられている。「玉藻の草子」(承応二年刊本より、『画本玉藻譚』の安倍康成と異なり、この本では泰成と表記される)を見ると、

泰成申まうすやう。しよせん、たいさん泰山府君の祭を、仕候はんずるに。玉たまもの前を、御取へとりのやくに。出させ給たまへ、その時泰成か申まうす処。あらはるへしと、申まうすければ。

とあり、同様に泰山府君の祭りに触れる。この神は仏教の信心に由来する『勸化白狐通』には見えず、「玉藻の草子」に記載されるものである。やがて、その祭りが行われ、玉藻前が壇に登る時の様子を描く部分について、『画本玉藻譚』では(安倍康成調伏妖怪)、

(玉藻前) 蘭奢らんじやの匂におひ、をのづからあざやかに薫り、身より光あかりさし出て、天人てんじんの影向えいむかとぞあやしまれ、見る者、魂たまを消くし心を中天ちゅうてんに飛とばす。

と、蘭麝の匂においが漂よい、身より光あかりを放はなつ玉藻前が記述される。一方、「玉藻の草子」には、

(玉藻前) をのづから、らんじやの匂におひ。あざやかに。身より光あかりを出す間。天人てんじんの、やうがふかと、思おもはれけり。

と、類似する内容が記されるが、これは『勸化白狐通』に記載し

ないものである。この二項において、『画本玉藻譚』が「玉藻の草子」と共通する内容を有することから、『画本玉藻譚』の著者が「玉藻の草子」に取材し、その内容を話に盛り込んだものと説明できる。

また、傍証として、「玉藻の草子」の表現をそのまま借用する例も見出せる。『画本玉藻譚』「兵庫頭頼政射怪鳥」では、鳥羽院が玉藻前の美貌と才覚に感心して溺愛し、「金瓊の床の前には、遙に千年の松を契り、玉宝の台の上には、遠き齡を万歳の龜に期し、あかしくらしおわします」と表現するが、「玉藻の草子」にも、「かつせうの、ゆかの前には。はるかに、千年の松を契り。玉のうてなの上には。とをきよはひを、万年のかめにこして。あかしくらしおはします」とあり、「千年の松」と「万年の龜」の比喩が用いられ、言葉もほとんど一致する。他に、玉藻前の美貌を形容するのに、『画本玉藻譚』には「一たび笑は、百の媚こびなる芙蓉楊柳の姿色」とあり、これは白居易「長恨歌」の「回眸一笑百媚生、六宮粉黛無顔色」を踏まえる表現であるが、「玉藻の草子」にも、「二度笑へは。百の媚こびあり。せいしか、かんし顔色よくも、いま爰こゝに有」とあり、その原拠を直接「玉藻の草子」に求められる。

『画本玉藻譚』の「玉藻の草子」のみならず、『勸化白狐通』にも依拠している。具体的に指摘すれば、「藤原道春が狐が化した赤子を養育すること」や、「和歌(筆者注：みさび江に底の玉藻は乱るとも知らるなみに深き心)によつて玉藻の名を賜ること」、「僧石屋の失敗譚」、「玄翁が小屋を建て殺生石の前に仏

法を講じること」などは、『勸化白狐通』と内容が共通し、『勸化白狐通』から取材したものと考えられる。

かくして、単調に陥らないよう、いくつかの先行する狐譚を借用し、苦心してそれらを話中に点綴融合させる『画本玉藻譚』の著者の姿が思い浮かぶが、その一方、既存の狐変妖婦譚の枠を超え、原拠とする狐譚にはない内容を案出する一面も窺える。例えば、源頼政と関わる物語を話中に盛り込む部分である。

『画本玉藻譚』の「玉藻前譚」において、頼政は牢獄に囚われる康成を救出する人物として、重要な役割を果たしている。近衛院が御悩を患い、康成が玉藻前の退治を奏上すると、玉藻前は怪鳥が毎晩内裏に飛び来るせいであると言いつくし、頼政に怪鳥を払い除く役目を与えた。その怪鳥を退治する夜、黒雲が紫宸殿の上に落ちかかり（兵庫頭頼政射怪鳥）、

（頼政）一心に八幡太神を念じ、暮目を取て、弓と矢つがひ、弦音高く一たび鳴す音に応じ、雲中に声あり……頼政再引て弦を鳴せば、雲中に叫ぶ声大雷のごとし、三たび鳴す時、怪鳥は内裏の庭上に落たり、（郎党猪早太が怪鳥を殺し、その鳥は）頭は猿のごとく、尾は蛇のごとく、手足は虎のごとく、鳴声鶴に似たり。

と、三度弦を鳴らすと、怪鳥が空より落ちて殺される。褒美として左府頼長が宝剣を与えるが、頼長が「弓はり月の入にまかせて」と吟ずれば、頼政は「ほと、ぎす猶も雲井に揚るかな」と返す。このストーリーは、単なる一つのエピソードとしてではなく、頼政の登場のきっかけとなり、玉藻前の狡猾さを際立たせ、話の流

れの一部として機能する。

頼政の「鶴退治」説話は、『平家物語』をはじめ、『源平盛衰記』、『太平記』などの軍記や、謡曲「鶴」、または説話集「十訓抄」、「月刈藻集」などにも記載され、多岐に亘って物語られてきたが、頼政が「弓はり月の入にまかせて」と返すのが一般である。『画本玉藻譚』では、従来のものとは正反対である¹⁰。このような相違を見せつつ、ではなぜ『画本玉藻譚』の「玉藻前譚」は、源頼政の説話を選択し、話中に盛り込んだのだろうか。これも深く「玉藻の草子」と関わりがあると考えられる。

「玉藻の草子」では、玉藻前が那須野に逃げ込み、それを退治するか否かを議論する際に、ある大臣が弓の名人を挙げ、神通自在な狐とはいえ、人間の力で退治できると説く。

漢朝の羿が。九つの日を射をとす。本朝のよりまさは。雲の中、ぬえを射る。い国の養由は。霞の中の、雁を射落し。しうは、雨のふるに儀を、こし。毒龍を射落す。

この中で、頼政の鶴退治が話題となる。前述の通り、「玉藻前譚」は深く「玉藻の草子」と関わるが、『画本玉藻譚』の著者は、その中の頼政の記述からヒントをもらい、頼政の鶴退治を転用し、話の一部として融和させる。康成の救出を助ける役割として頼政を話中に登場させることを通じ、話に変化を与えて妙味を加えている。

頼政説話の添加について考えてきたが、実際、「玉藻の草子」は多様な形態で世に伝わり、伝本によっては頼政を語らないものも存在する。『画本玉藻譚』と「玉藻の草子」の関係を考える際、

『画本玉藻譚』の著者は如何なるテキストを参考にしたか、という問題も浮かび上がる。前述の通り、『画本玉藻譚』では、玉藻前が神壇に登る際に身より光を放つ点は、「玉藻の草子」から取ったものである。この点と合わせ、筆者は玉藻前説話を語る写本・奈良絵本・絵巻など、合計二十五種を考察した。頼政の鶴退治、および玉藻前が壇に登る際に光を放つことをともに記載するものは五種を数える。すなわち、

①慶応義塾大学図書館蔵本・刊本（承応二年（一六五三）西田庄兵衛刊）・二冊

②国会図書館蔵本・刊本（寛文年間（二六六一―七三）菊屋七郎兵衛刊）・一冊

③チェスター・ビーティ図書館蔵本・奈良絵本・三冊

④金沢市図書館蔵本文庫蔵本・写本・二冊

⑤京都大学美術史学研究室蔵本・奈良絵本・二冊

このうち、時代的に①承応二年刊本が先行するが、②寛文年間刊本はその内容を同じくする後刷本である。③④⑤は成立年次が不明である。①と②は刊本であるため、発行数量が多い。流通の範囲と閲読の利便性から考えれば、『画本玉藻譚』の著者はおそらく①あるいは②を用いたと推察できよう。しかし、二つの刊本は『画本玉藻譚』の創作年次とは百年以上前に遡る。この百年間に後刷等の刊本も流通したか、または刊本を写した写本も存在したであろうか。

三、『三国悪狐伝』の影響

『画本玉藻譚』と同様に、三国伝来の狐変妖婦を物語る作品には、『三国悪狐伝』（別名『悪狐三国伝』）という実録的写本の一種がある。『三国悪狐伝』は褒姒を加え、狐妖は「妲己―花陽夫人―褒姒―玉藻前」の順番で三国に渡って変転する。その著者と成立年次は未詳であるが、山下琢巳が寛政九年（一七九七）の年紀を持つ写本を取り上げ、遅くとも寛政九年にすでに成立していると考えられる。その巻数に関しても、十五巻、上下二巻、不分巻など多様である。『三国悪狐伝』は曲亭馬琴によつてたび重ねて考証された書物であり、『絵本三国妖婦伝』の粉本ともなる。現存する『三国悪狐伝』の写本の数量が非常に多いことから、近世において『三国悪狐伝』は大いに流布して一世を風靡したと推察される。¹³⁾

『画本玉藻譚』の成立に、この『三国悪狐伝』が関与したのだろうか。これに対し、山下琢巳は、『画本玉藻譚』が直接『悪狐三国伝』に拠ったかどうかは、その作品からは明らかにすることはできない」と述べる。¹⁴⁾しかしながら、両書の細部にまで注目すれば、『画本玉藻譚』が『三国悪狐伝』の影響を受けた痕跡が見つかると考えられる。¹⁵⁾

I 『三国悪狐伝』を参考にした痕跡

例えば、『画本玉藻譚』の以下の一節では、『三国悪狐伝』の影響を受けた可能性が示唆される。玉藻前は退治された後、また殺

生石となつて人民を悩ます。僧石屋が殺生石を引導しようとするも、玉藻前に惑わされて成功しない。その際、玉藻前が石屋に對し、自身の來歴について語る（「惡靈為「婦善道」」）。

（我は）唐土にては殷の紂王の後蘇妲妃、天竺にては斑足王の花陽夫人、日本鳥羽院の上臈玉藻前と變化せし、九尾金毛白額の老狐が亡魂なるぞや。我天地の開けざる時に生じて、治を見ては乱を起し、正道を邪道に変し、卒に儒仏神の三教を亡し、人をして魔界に入んと、三国に渡つて妖をなせしに……

と、おのれは三国に渡る九尾の狐であり、天地が開けていない時に生まれ、人間を「魔界」に引きずり込もうという。これを『三国悪狐伝』と照合して見ると、内容だけでなく、用いる言葉が共通している部分が見出せる。巻十五に記される玄翁が殺生石となつた玉藻前を論ずる場面では、玄翁が石に對して扨子を打ち振ると（『三国悪狐伝』の引用は、早稲田大学図書館蔵本（早大本）によるが、以下の一節は転写による誤りがあるため、筆者架蔵A本による。訓点は原文に付いているものである）、

石魂曰、我_レ天地開闢陰々狐。玄翁曰、陰狐怨心如何ナリ謂_フ。
石魂曰、魔国ニシテ獸王ニ成ント思_フ。玄翁曰、始朝有_二出スルツ鳥羽帝ノ代_一。石魂曰、我_レ始_メ唐殷ノ紂王又天竺ニ斑足犯_レ再_レ唐周幽王ヲ不_レ遂……⁽¹⁶⁾

と、玉藻前が玄翁に來歴を語る。『三国悪狐伝』は和文で書かれた作品であるが、この部分は禪問答の雰囲気を出すため、敢えて漢文調を選んだのであろう。この一節の文意は必ずしも理解

しやすいものではない。参考として、堀誠蔵本（堀本）の関連部分を提示したい。堀本では、転写者が理解しやすくするためか、引用部分の各句の左側に、説明の文が付されている。波線部に「わられてんちかいひやくのもとみんきのと、こほりより生たる狐也」とあり、傍線部に「このくにをまことしけだもの、わふとなりたきのいわれなり」と付されている。この一節の文意を要約すれば、「玄翁の問いに對して玉藻前は、自身が天地開闢の際に陰氣によつて誕生し、人間界を魔国にして獸王となろうとして、三国の人君を惑わす」という内容である。この一節は、『三国悪狐伝』の冒頭部分を踏まえている。それと合わせて見ると、引用した内容の意味がよりはっきりとなる（早大本『三国悪狐伝』巻一）。

人間よりたつときはなし。人は万物の長_{（神也）}。其万もの長たる人間之王位を犯し、此世を魔国になさんと計_{（はか）}り、三国伝來の狐なり。

と、ここでも、狐妖がこの世を「魔国」にして世界に君臨しようと述べる。この部分に相次ぎ、狐妖の誕生について記載されている（早大本『三国悪狐伝』巻一）。

抑_{（おさ）}く、三千世界は玉の丸きごとくにして、是ニツに別れて中より律呂の気たち分、すみたるは軽ふして上りて天となり、にこりたるは重して下りて地と成。これ天地開びやくの始まり（中略）其時、陰陽滞りて一疋の狐となり、天地初りてより以来、神代の年数何万といふ年を経て、後に此狐、姿毛色替りて面は白く尾九ツ、其毛悉く金色なり、是を名付て金毛九尾白面の狐といふ。

と、天地開闢の際に滞る陰陽の気によって狐妖が誕生することが、より詳しく記されている。筆者の調査によると、狐妖が天地開闢の際に誕生するという設定は極めて珍しく、『三国悪狐伝』以外の近世の狐話には見出せないものである。前述した『画本玉藻譚』の形成と深く関わる作品を考察すれば、『勸化白狐通』では、単に狐妖が「三千年ノ老狐」に言及し、中世に成立して近世にも流布していた「玉藻の草子」では、「八百歳を経たる」に触れるくらいで、『通俗武王軍談』の「妲己譚」では、該当する部分が見当たらない。

『画本玉藻譚』の当該部分と『三国悪狐伝』の巻十五の部分と比べると、まず高僧の引導に対し、殺生石となった玉藻前が三國に渡る来歴を語る点が一致している。また、その語る内容では、「魔界」と「魔国」の表現が類似しているだけでなく、『画本玉藻譚』の狐妖が「天地の開けざる時」生ずる記述も、『三国悪狐伝』の狐妖が「天地開闢」に生まれる内容と相通じる。狐妖が天地開闢の際に陰気によって誕生する設定は、『三国悪狐伝』の特有のものであり、加えて内容と表現の類似性も有することから、『画本玉藻譚』の当該部分は、引用した『三国悪狐伝』巻十五の部分、および冒頭部分を参考にした可能性が高いと言えよう。

さらに、文中の表現や狐妖の設定のみならず、話の構成においても、『画本玉藻譚』が『三国悪狐伝』の影響を受けたと思われる部分が存在する。例えば、玉藻前が那須野の国守の妻子と化し、照魔鏡によって退治される部分である。玉藻前は康成に退治されて那須野に逃げ、国守保隆の妻子と化して悩まず。その真偽を見

分けられない保隆が都に注進すると、朝廷は三浦介と上総介に照魔鏡を与える。照魔鏡によって狐妖は本性を暴かれて去る。前掲の拙稿¹⁷⁾「玉藻前と照魔鏡」では、筆者はこの部分について、『勸化白狐通』に祖型を求め、『三国悪狐伝』の関与の可能性にも言及した。ここでは、両書の当該場面に對する更なる分析を通し、『画本玉藻譚』が『三国悪狐伝』から影響を受けたと考えられる具体的な根拠を提示したい。それは主に三点にまとめられる。

第一に主人公の身分である。『勸化白狐通』では、『画本玉藻譚』のこの部分と類似する話型が認められるが、その主人公は「百姓」である。狐妖が「百姓」の男の妻子と化するが、近隣の「百姓」が上洛して照魔鏡を持ち帰って退治する。しかし、『画本玉藻譚』では、悩まされて都に注進するのが「国守」である。『三国悪狐伝』を考察すると、類似する話型が存在するのみならず、狐妖に惑わされて都に報告するのが「領主」(八郎である。厳密に言えば、「国守」と「領主」はやや概念が異なるものであるが、¹⁸⁾那須野を治める人物としては共通しており、『勸化白狐通』の「百姓」とは大きく身分が異なる。しかも、『画本玉藻譚』では「国守」が自主的に狐狩りをするが、見つけられない内容が語られる。一方、『三国悪狐伝』でも「領主」が狐妖を狩ろうと試みるが失敗する内容が記され、『画本玉藻譚』と相通じる。これは『勸化白狐通』にはない内容である。

第二に狐妖の化け方である。『勸化白狐通』では、狐妖が「百姓」の男の妻の外出を狙い、妻に化じて家に入るが、その翌日、本当の妻が家に戻り、狐妖が化した妻と本当の妻が前後して家に入る

ことで、時間のずれが生じる。しかし、『画本玉藻譚』と『三国悪狐伝』においては、狐妖が「国守」または「領主」の目前で妻に化する。俄かに妻が二人となる点が一致している。

第三に安倍康成が照魔鏡を言上する場面である。『画本玉藻譚』では、「国守」の注進を受け、康成が照魔鏡で退治すべしと奏上する部分が述べられる。『三国悪狐伝』でも同様に、安倍泰近やまぢか（この本では泰近となるが、康成と同一人物と考えてよい）が内侍所の御鏡で狐妖を除くべしと言上する。しかし、『勸化白狐通』では単に「泰成加持ノ鏡」（この本では康成が泰成と表記される）とあり、泰成が言上する内容が全く記されていない。

この三点を踏まえると、『画本玉藻譚』の玉藻前が那須野の国守を悩ます部分では、『三国悪狐伝』と共通する部分が多く、『勸化白狐通』よりむしろ『三国悪狐伝』により近い。その影響を受けて形成した可能性が高いであろう。前述した『画本玉藻譚』の玉藻前が来歴を語る一節における、『三国悪狐伝』の巻十五および冒頭部分との類似性を合わせ、これらの内容は、『三国悪狐伝』を参考にした可能性を大いに示唆している。

II 『三国悪狐伝』の利用

そもそも、『画本玉藻譚』と『三国悪狐伝』におけるもう一つの大きな共通点は、狐変姫己の話譚を全編の冒頭に据え、天竺の花陽夫人・本朝の玉藻前と絡め、三国伝来の狐変妖婦譚を構成することである。この共通点は特別な意味を持つと考える。

中世の文献を考察すると、玉藻前説話の系譜には狐変姫己が現

れず、むしろ、狐変褒姒が強い印象をもって語られる。『平家物語』（早稲田大学図書館蔵元和七年流布本・巻二）にいわゆる「烽火戯諸侯」の故事が記載され、褒姒は終に「野干（狐の別名）」となつてはしり、うせける」とある。『臥雲日件録』（享徳二年）に、「此狐乃周褒姒所化」と記され、『唐鏡』（巻二）に、「（幽王）ノ褒姒、国ヲ亡シ、君ヲ失ヒ奉ル、或説ニハ狐狸ノ変化トモ申セリ」とあり、『下学集』（犬追物）でも褒姒を狐とする。また、『画本玉藻譚』が強く依拠する「玉藻の草子」でも、狐が「塚の神↓褒姒↓玉藻前」と変転する系譜が窺えるが、これは「神明鏡」（巻上）や謡曲「殺生石」においても同様である。

平安期の作品である『狐媚記』に、「殷之姫己為三尾狐」の記載があるとはいえ、中世以来褒姒は狐と強く結び付くが、姫己と狐との関連が薄く、狐変姫己譚は玉藻前説話に関与しなかった。しかし、『画本玉藻譚』では、狐変姫己譚を玉藻前説話の一部として機能させる。これは『画本玉藻譚』の著者の独自の発想なのだろうか。

前述の通り、近世における狐変姫己譚の流行は、『通俗武王軍談』の流通と無関係ではない。当然のことながら、『通俗武王軍談』には玉藻前が登場しない。『画本玉藻譚』の著者がそれに依拠しつつも、中に記される狐変姫己譚を花陽夫人・玉藻前と連続させ、しかも全編の冒頭に据えた。先に論じたように、『画本玉藻譚』は『三国悪狐伝』の影響を受けた可能性がある。『三国悪狐伝』では、正に狐変姫己を冒頭に据えて語る。これを踏まえて考えると、『画本玉藻譚』の著者が『三国悪狐伝』を利用し、狐

変姫己譚を冒頭に据え、花陽夫人・玉藻前と列ねて三国物として語る、という発想を借用したと考えられるであろうか。

『三国悪狐伝』の成立年次は未詳であるが、現時点で把握された最古のものは、寛政九年（一七九七）の年紀を持つ写本である。寛政九年は『画本玉藻譚』の著者が後語で言う、『画本玉藻譚』の実際の成立年次でもある。『三国悪狐伝』は寛政九年以前の成立と推察するが、もし寛政九年に成立したとしても、『画本玉藻譚』の著者がその存在を知り、いち早くそれを手に入れた可能性もある。『三国悪狐伝』の出来具合について、後藤丹治は『三国悪狐伝は、その構想や、平板に失し、文詞また簡素に過ぎて、読本の作としては甚だ距離のあるものであつた』と指摘する。²⁰『画本玉藻譚』の著者は『三国悪狐伝』から話の構造を借用しながら、従来の狐変妖婦譚を利用して内容を豊かにさせ、読本としての作品を仕上げたと考えてもよからう。

しかし、ここではもう一つ注意すべき点がある。それは『画本玉藻譚』では中世以来の狐変妖婦譚を用いないことである。中世において狐変妖婦が多く語られ、近世に入ってから『三国悪狐伝』はその流れを汲み、褒姒を加えて狐妖を唐土に二回登場させる。『絵本三国妖婦伝』はさらにこれを受け継ぎ、同じ構造で物語を展開する。『画本玉藻譚』の著者が取ってそれを語らないのには、いかなる意図があるのだろうか。木村黙老の『増補稗史外題鑑批評』（天保十年）「第五時代物の部」の条から、この疑問に対する一つの解答が得られる。『絵本三国妖婦伝』と『画本玉藻譚』を品評する記述である。

妖婦伝を玉藻譚よりよしといふも受がたし。妖婦伝には妖狐唐土より天竺にいたり、又再び周に來りて褒姒となるに作るは、贅言に似て観るに麤たる心地す（中略）俗謡殺生石に、周の幽王の後褒姒と現じといふ文句あるに合さんとての事ならんが、何にしても、妖狐が唐土へ二度出ては、折角の作意が中たるみせり……

と、『画本玉藻譚』より『絵本三国妖婦伝』が良いとする説に対し、『絵本三国妖婦伝』では狐妖が姫己に変じた後、また褒姒と化して再び唐土に戻るのが贅言であるとす。これは正しく『画本玉藻譚』の著者が狐変妖婦を切り捨てる所以である。九尾の狐が登場する舞台を、唐土・天竺・本朝それぞれ一回ずつとすることこそ、正に三国物たる『画本玉藻譚』の醍醐味であり、唐土に二度出現するのは、作品の妙味が損なわれる。中世の文献はもとより、近世に入って『三国悪狐伝』を含める狐譚において、狐変妖婦のイメージが強いものの、『画本玉藻譚』の著者は作品に妙味をもたすため、従来の狐変妖婦譚を利用しつつも、取って狐変妖婦を選択せず、工夫を施したと言えよう。

四、結語

以上、『画本玉藻譚』と先行する狐変妖婦説話との関わりを辿ってきた。まとめると、『画本玉藻譚』の「姫己譚」は『通俗武王軍談』に大いに依拠し、「花陽夫人譚」は「勸化白狐通」を利用すると同時に、『通俗武王軍談』の影響も受けている。「玉藻前譚」に関しては、『勸化白狐通』に拠りながら、「玉藻の草子」をも利

用したと考察する。

『画本玉藻譚』の著者は原拠となる書物からそのまま依拠するのではなく、バリエーションを創出するため、加工を施した。三國物として唐土では「姐已譚」に話譚を集中させたことや、「花陽夫人譚」において『通俗武王軍談』を活用し、紂王の像を斑足王に投影することなどに、その意図を看取できる。また、「玉藻の草子」の記述から、源頼政の「鶴退治」を「玉藻前譚」に盛り込むように、『画本玉藻譚』の著者は既存の狐変妖婦説話をヒントに、これらを話中で融合させ、物語としてより発展させる。

さらに、今まで不鮮明であった『画本玉藻譚』と『三国悪狐伝』との関係をも検討し、『画本玉藻譚』の著者が『三国悪狐伝』を参考にして、その内容と構造を利用した様相を具体的に指摘した。また、作品に妙味をもたらすため、中世以来受け継がれてきた狐変褒姒を取えないと推察した。

これらを踏まえると、『画本玉藻譚』の著者は、既存の狐変妖婦譚を駆使しつつも、その枠を越え、話に新味をもたらすため苦心した姿が想起されるであろう。『画本玉藻譚』と『絵本三国妖婦伝』の出版後、狐変妖婦を題材とする作品が頻出し、狐をめぐる一つのブームが沸騰したと考えられるが、それは一時に流行してすぐに廃れ去ったものではない。文化年間から慶応年間に至るまで、狐変妖婦譚が続いて創作され、日本近代小説に至るまで大きく影響を与えた。この二つの説本が、後世の狐譚に甚大な影響を及ぼしたことを、最後に改めて確認しておきたい。

注(1)

『京撰戯作者考』(木村黙老著)に、「又、絵本太閤記、玉藻譚……は、右の確斎(武内確斎)作にて、玉山の名を借りしものなりといふ」とあり、武内確斎の作と説く。

(2) 後語に、「過にし寛政丁巳のとし、此物語を編、絵を繙ものとして、既に書肆に授ぬれど、また校を終ざるほどに(中略)三国妖婦伝とかやいえる絵草紙の、東都にて行れし……」とある。

(3) 中村幸彦「読本展回史の一齣」(『近世小説様式史考』・中央公論社・一九八二・四〇四頁 初出 一九五八)、横山邦治担当の『絵本玉藻譚』解説(『日本古典文学大辞典』・岩波書店・一九八三)による。

(4) 『糸車九尾狐』の「殷紂王寵妃妲己之凶」が、『画本玉藻譚』巻一・口一丁表などを借用していると指摘(佐藤悟「山東京伝の文学と絵画——『糸車九尾狐』と『絵本玉藻譚』」『国文学』・解釈と鑑賞』七三卷一二・二〇〇八・一〇七頁)。

(5) 堀誠「『三国悪狐伝』と玉藻前説話の変容」(『日中比較文学叢考』・研文出版・二〇一五・七四頁 初出 一九八八)による。

(6) 新たに据えた標題は、「紂王殺姜皇后」、「西伯南伯奉表諫紂王」、「太公望破高明高覺」、「三仁去而陷成陽」、「狐妖趣西」の五条である。

(7) 前掲の堀の論文の七三頁による。

(8) 「姜皇后の廢黜を勧める」、「東伯を計略することを助言」、「鹿台・鉅橋を建立」、「五將の派遣を提案」などの部分、ひいては武王の軍隊が都に臨み、軍を率いて最後の悪あがきをした部分においても、費仲の名を挙げていない。

(9) 「玉藻前譚」の全編を見渡すと、「玉藻の草子」から吸収した箇所がほかにも散見される。『画本玉藻譚』では、三浦介と上総介が稽古する際に、三浦介が犬を射落し、上総介は馬に鞆をつけて的とする点(『勸化白狐通』では、両介はともに犬を用いる)や、狐が夢を託し女房姿で寛恕を乞う点(『勸化白狐通』にはない)、狐の屍が都に運ばれて舟で川に流され、その執心が殺生石となる点(『勸化

白狐通』では、狐の死骸が那須野に残って殺生石となる）など、全て「勅化白狐通」に拠らずに「玉藻の草子」と一致する。

- (10) 謡曲「鶴」（新編日本古典文学全集本）では、怪鳥の姿を「頭は猿尾は蛇、足手は虎のごとくにて、鳴く声鶴に似たりけり」とあり、月刈藻集』では「暮目ノ役ヲツトメシ」とあるが、怪鳥の姿に言及しない。ここで暮目を用いるのは、後述する『三国悪狐伝』との関連があるか（『三国悪狐伝』では泰近（成）は瞽目の法を修して玉藻前の正体を暴く。頼政の歌が従来のもとの正反対となるのは、『画本玉藻譚』の著者の誤記か、再考を俟つ）。

- (11) ①は「室町時代物語大成」九（角川書店・一九八二）、②は国会図書館オンライン、③は麻原美子の翻刻（『国文目録』二三・一九八四）、④は国文学研究資料館マイクロフィルム、⑤は「京都大学蔵むらまちものがたり」七（臨川書店・二〇〇二）による。

- (12) 山下琢巳「実録的写本『悪狐三国伝』の成立について」（『読本研究』第四輯上・淡水社・一九九〇・一六頁）による。

- (13) 曲亭馬琴『玄同放言』巻二「宋陳彭年綽号」、『燕石雜志』巻一「恠刀彌」、『昔語質屋庫』巻五「九尾の狐の姿」に、『三国悪狐伝』と関わる内容が載る。後藤丹治と堀誠が、『絵本三国妖婦伝』は『三国悪狐伝』に基づくと指摘する（後藤丹治「三国妖婦伝について」（『説林』三巻一号・一九五一）、前掲の堀の論文による）。拙稿「玉藻前と照魔鏡——『絵本三国妖婦伝』と『画本玉藻譚』における「狐妖退治」の形成をめぐる」（『和漢比較文学』六二・二〇一九・三四頁）に、『三国悪狐伝』の写本に関する整理がある。

- (14) 前掲の山下の論文の二二五頁による。

- (15) 補足説明するが、『三国悪狐伝』が『画本玉藻譚』より後に成立したとは考えられない。前述の通り、『画本玉藻譚』の後語に寛政九年（一七九七）に成稿したと記されるが、実際に刊行されたのは文化二年（一八〇五）である。それより二年前（一八〇三）に出版された『絵本三国妖婦伝』の序文に、「嘗有狐婦之伝十五卷」と

ある。注(13)に示したように、後藤丹治と堀誠により、この「狐婦之伝」が『三国悪狐伝』であることが解明された。『画本玉藻譚』の出版に先んじて、『三国悪狐伝』が『絵本三国妖婦伝』に利用されたことから、『三国悪狐伝』が『画本玉藻譚』に後出する可能性がないと推定される。

- (16) 早大本では、「石のいわく、我天地開元陰々之狐。玄翁いわく、陰狐怨心如何謂。石魂のいわく、魔国獸王成鬼。玄翁のいわく、始朝有出鳥羽帝代に。石魂の曰、我始唐土殷紂王、又天竺にて斑足を犯し、再び唐の周幽出以来本望とげず」とある。

- (17) 注(13)前掲論文。

- (18) 『日本国語大辞典』によると、「国守」は国司の長官、国のかみ。「領主」は平安時代以降、特定の土地を所有し、かつその土地と在住民を直接的にあるいは、代官などによって間接的に支配し収益する者、と定義される。

- (19) 『画本玉藻譚』（巻五）では康成が「希くは臣に一の宝鏡を賜ひ、一七日妖魅調伏の法を修し、弓取の武士に仰て彼宝鏡を与へ、那須野の原を獵せ給はゞ、老狐を狩得ん事安かるべし」と奏上する。『三国悪狐伝』（巻十三）では泰近が「是をわけるには、天子の御宝三種のじんきの内に、内侍所の御鏡を以て移す時は、其姿顕る」と奏聞する。

- (20) 前掲の後藤の論文の五頁による。

※本文の引用にあたり、句読点、返り点、振り仮名、傍線などは、筆者によって適宜に施し、旧字は正字に改めた。引用の中に括弧で示す本文は、筆者による説明である。

※本文の引用は、以下の書物による。『画本玉藻譚』（国文学研究資料館蔵）、『通俗武王軍談』（国文学研究資料館蔵マイクロフィルム・盛岡市中央公民館蔵）、『勅化白狐通』（国文学研究資料館蔵マイクロフィルム・中村幸彦蔵）、『三国悪狐伝』（早稲田大学図書館蔵）、『玉藻の草子』（『室町時代物語大成』九（角川書店・一九八二））『増

補碑史外題鑑批評』（早稲田大学図書館蔵）。

〔付記〕 本稿の一部は二〇一八年度早稲田大学国文学会秋季大会における

口頭発表「『画本玉藻譚』における狐話の形成——妲己譚・花陽夫人譚を中心として」に基づいたものである。ご教示をくださった諸氏に御礼申し上げます。

新刊紹介

河野貴美子 Wiebke Denecke
新川登亀男 陣野英則編

『日本「文」学史 第三冊
「文」から「文学」へ』
—東アジアの文学を見直す—

本書は日本の前近代から現代へ至るまでにおける、「文」の概念の変遷について論じたシリーズであり、国内外から、合計四十八名の執筆が収録されている。この第三冊は、日本の「文」が西洋的学問や概念との出会いを通して「近代化」され、「文学」へと移行したことを東アジア全体の問題として位置づけ、現代における「文学」の意味を再検討するものである。

第一部では、日本、中国、韓国それぞれにおける「文」という概念が、科挙制度の有無、国語の学問的な体系化、語彙や文体の創造と受容、混用といった要素によって、いかに変容していったかを解き明かそ

うとしている。東アジアというスケールの中で、変容の相違点や、その原因となった国家間の影響関係を、主に当時の思想的視点から詳細に考察している。更にこの章における社会的な視座は、印刷文化という新しいメディアによる「文」の流通と、その影響力の変化や戦争の影響など広範囲の議論に及ぶ。

第二部では「文」という、漢字漢文文化において発達し、統一された概念の基盤が、戦争と植民地主義の影響下で放棄されたという議論を軸に考察がなされている。西洋に対する東洋という認識の改変を迫られ、東アジア全体がアイデンティティーの危機に瀕したという議論は珍しくないが、本章ではその中で文学が雑誌や小説という媒体としてどう機能したかについて、日中韓それぞれの特徴が収められている。西洋化に伴い、それぞれの国で生み出された表現や書き直された文学史がこの時代の戦争と密接に影響しあっていることや、翻訳が各国の文学の発展に密接に関係しているこ

となどの幅広い議論が展開されている。

第三部では戦後の文学が、消費されるポップカルチャーのような変質を見せ、このような大衆文化、サブカルチャーこそが「国家」を代表する文化としての地位を獲得している現状について言及されている。コンピューター、スマートフォンなどの技術が新たな言葉や文体の誕生を加速させ、人々がそれを共有していく新しい環境において、文学は消費社会、学生運動などの新しいテーマや方向性を獲得し、現代の人々が期待している文学の新しい存在価値が提示されている。

本書は日本の近代文学を東アジアというスケールで包括的に比較し理解を深められる優れた内容となっている。比較文学研究のアイデアを探求する上での参考としても非常に有益な書である。

（二〇一九年五月 勉誠出版 四六版 六七頁 本体三八〇〇円）
〔中道裕貴〕